

末っ子の私はなぜ、実家を継いでほしいといわれたのか。

こんにちは！ゆきです。

私は3人兄弟の末っ子なのですが、
実家は商売を継いでほしいといわれていました。

なぜでしょうか。

これは私がぜったいに稼ぐんだ！と決めた理由につながっ
てくる内容です。

それと同時に、私の家族に関する少し深刻な内容も含みます。

では、続きをどうぞ。

私の実家は商売をしていました。

ひいおじいちゃんのころからやっていて、
父が継いで酒屋をやっていたんです。

自宅の1階がお店だったから、
幼いころは仕事をしている両親のところへ行って
ちょっかいを出していました。

近所の幼馴染たちと遊びながら、
ときどきお店に顔出して駄菓子買ったり、

一角にはお酒が飲めるカウンターがあって
テレビもあったから
友達と集まってゲームしたり、

すごく楽しい思い出があります。

お盆には花火を仕入れて、
ひとつひとつ値札をつけ
お店の前で売る手伝いもしていました。

ビールケースに段ボールをのせて、
その上に花火をならべる。
近所の人たちがたくさん買いに来て
すごくにぎわいました。

同い年くらいのちっちゃい子も
中学生くらいの大きい子も、
それから親御さんも

みんなに来てくれてすごくワイワイ、がやがや盛り上がりま
した。

一通り終わったら、
家族で花火タイム。

打ち上げ花火よりも
手持ち花火が好きで、
楽しさあまりに
うっかり人に向かってやったりして。

しょっちゅう怒られました。
でも、また花火に夢中になって

周りが見えず、おこられる（笑）

あとは煙幕も好きでした。
2, 3個やって、ドロン！
って隠れる感じが好きだったなあ。

話がそれてしまいました。

酒屋をやっていたのは

私が物心ついてから2～3年くらいまで。

短い間だったけど、楽しくて

書いているうちに思い出が出てきました。

さて、実家を継いでほしいという話に戻りましょう。

私が5歳になるころ

酒屋をたたんで、コンビニをやることになりました。

地元は田舎だったけど、

商売を時代に合わせたかたちにしたほうがいい。

とかいろいろと考えるところがあったみたいです。

田舎だと、

家を継ぐっていう考え方が

強く残っています。

実家をだれかが継いで、暮らしていく。

それは商売も同じ。

親が商売やってるなら、子どもはそれを継ぐ。

当然そうするよねって

雰囲気がある。

私には上に兄弟がいました。

9歳上の兄と、6歳上の姉。

だいたい家を継ぐのは長男。

我が家でいえば兄。

けれどそれはできませんでした。

兄は障害を持っていました。

少しだけ。

幼いころに階段から落ちただったかで
頭に水がたまるようになったみたいです。

軽度の知的障害です。

小学校低学年のころはなんとかやっていたけど、
だんだんと難しくなって

高校生になるころには、全寮制の養護学校に通っていました。

見ためにはまったくわからなくて、
ふつうに生活できるし、
仕事もしていました。

ただ、書類の手続きとかになると
ちょっと難しい。

じゃあ、姉は
というと

中学生のころには
将来の夢が決まっていました。

メイクさんになりたい。

メイクをすると自分を変えられることに感動して
やりたいと思うようになった
とっていました。

私は特にやりたいことはなく、
なんとなく毎日を過ごしていました。

ですが、いい成績をとることは得意でした。

頭がいい、そう思われたのか
コンビニを継いでくれたらうれしいと
いわれました。

たしかに学歴でいえば
親、兄弟含めて
大学いったのは私だけ。

それも、国立大学にはいるくらいだったから
期待もしてもらえたのかな
と思ったりしますが

実際のところ私は就職から逃げているだけでした。

就職からひたすら逃げていた話は、
「クズだったレポート」にまとめています。

気になる方はリンクを探してみてください。

結論をいってしまうと

コンビニを継ぐひとはおらず、
私が学生を終えたとき、別の方に譲りました。

もちろんタダで、というわけではなく
きちんとした手続きののち
箱だけ残して、

別のオーナーさん、アルバイトさんが
はいつて運営されています。

地元に戻って父とスーパーにいくと、
経営していたコンビニの前を通ることがあります。

父は吹っ切れたというけれど、

やっぱり名残惜しそうで。

18年ほど、毎日のように通勤していた場所だし
そうだろうな、と感じます。

まだ私が学生のころ、
父がつぶやいたことがありました。

コンビニの経営は大変だけど、
収入としてはそこそこになるからいいと思うんだけどな。

たしかに、収入は大事だと思います。
それなりにお金を稼がないと

生活するだけでいっぱいになって
余裕をもてなくなります。

実家は継ぎたくない
とっていた私ですが、

しっかり稼がなきゃという
気持ちだけはありました。

1つは、たくさん学校に通わせてもらった分。
大学も行って、専門学校も行って
これだけやってきて、生活がやっとだなんて情けない。

もうひとつは姪っ子たちの存在。
兄は結婚していました。

養護学校で知り合った人と結婚。
子宝にも恵まれて、
ほとんど年子で女の子3人も生まれました。

喜ばしいことですが、

遺伝したのか

姪っ子たちもみんな

軽度の知的障害がみられました。

兄や奥さんと同じく

見た目にはまったくわからないけど、

やはり学校の勉強にはなかなかついていくことができません。

ふとした瞬間に思うんです。

この子たちはどうやって生きていくのだろう。

今の時代、

障害者をうけいれてくれる

雇用先もあります。

障害者に対する年金というのもあります。

生活に必要なお金を

まかなうことはできるかもしれませんが、

お金をうまく扱えるのか、

役所の手続きが必要な場面ではどうするのか、

心配に思います。

少しでも面倒を見てくれる人がいればいいのですが、

そこが心配の種。

いま、姪っ子たちを面倒みれる人

私の父しかいないのです。

兄嫁さんのお父さん、お母さんはいません。

親戚で面倒みれる人もいません。

私の母もいません。

そして

兄もいません。

それは私が大学3年生になったころ、突然起こります。

兄嫁さんの父が亡くなりました。

原因までは聞いていませんが、まだ50代だったと思います。

そして、葬儀に出席するため

兄嫁さんの実家に行った

兄と兄嫁。

そこで兄は亡くなります。

幼いころ階段から落ちるかして、
頭にみずが溜まるようになった兄は、

軽度の知的障害と、痙攣(けいれん)持ちになりました。

ストレス、
睡眠不足、
アルコールのとりすぎ、

こういったことで
けいれんを発症するようになったのですが、

あのときは葬儀、お通夜ということで
気を張っているし
慣れない兄嫁の実家でストレスがかかり
遅くまでお酒を飲んでいた。

いろいろな原因が重なって、
これまでにないくらい
ひどいけいれんを起こしたそうです。

そして毛細血管が破裂して、、、。

私が聞かされた経緯はこんな感じでした。

ある日、とつぜん家族から連絡がきて
兄が危篤だと聞かされた時は言葉になりませんでした。

まさかそんなことが起こるなんて思っていません。

まだ29歳でした。

それから半年したくらいか、

今度は母が逝きました。

母が倒れているのが見つかって、危篤だ。と
連絡がきました。

まったく理解ができませんでした。

つい1か月、2か月前

お盆で帰った私は、父、母、姉、兄嫁、姪っ子たち
みんな集まって花火をしたんです。

すごく元気な姿を見ていました。

なんでこんなに続けて。

どうしてこうなってしまったのか。

あまりにショックで

正直、連絡をもらった時のことはあまり覚えていません。

大学生になったころ、
父と母は離婚していました。

もともと性格が正反対だった2人は
よくケンカをしていて、

いっそ離婚してしまったほうがいいんじゃないかと思える
ほどでした。

それほど、家の中でも経営するコンビニの中でも
大声でケンカすることがしょっちゅう。

でも、子どもが大きくなるまではやめておこうと
離婚せずにいたんですが

私が大学生になったころ離婚をきめました。

変わらず、父の経営するコンビニに
勤めていた母でしたが、
家は別で借りて、一人で生活するようになっていました。

それが仇(あだ)となったのです。

ある日、また父と母が口論になりました。

母は頭に血が上って、仕事場から帰り
自宅へ戻ったそうです。

それから3日ほど出勤してきませんでした。

こんなことは前に何度もあったことです。

ケンカをしては1日、2日

家に帰ってこない母。

だからこそ見つかるのが遅かった。

また機嫌なおったら出勤してくるよ

って思われていた。

ケンカをして自宅に帰った日、

母は家で倒れました。

3日ほどたって、あまりにも連絡がとれなくて

おかしいと思った姉が

母の住む家にいったところ、

倒れていたそうです。

まだ命はあったけれど、

危険な状態にあったのはあきらかでした。

3日も同じ体勢で倒れ、

体には床ずれのようなあとが、

床には母が倒れていたあとが

ついていたそうです。

私も連絡をもらい、なんとか地元へ帰り

母の最期のときをみました。

脳の血管が

切れてしまったという母の顔は

血がたまって真っ赤に晴れ上がり、

気道まで圧迫しているのか、

呼吸がとても苦しそうでした。

家族が母に呼びかける中、

あまりに辛そうで、私は言葉をかけることができませんでした

た。

母の心臓がとまったあと、
血が引いて、
見知った母の顔になったのをみて

おつかれさま。

そう思いました。

兄のときは最期に立ち会えなかったけど

今度は最期に立ち会い、

本当に逝ってしまったんだ、という気持ちと

本当に逝ってしまったんだろうか、という気持ちが

いりまじっていました。

病院の先生によると、脳の血管が切れてしまったから

たとえすぐに発見できたとしても

助からなかっただろう。

と言われたようですが、

最初に見つけた姉は、

自分をもっと早く気づけば
倒れっぱなしにせずに済んだのに。

そうこぼした姉の顔は直視できませんでした。

兄嫁さんのお母さんはずっと昔に離婚したかでもともと、いなくて

私の実家には

父、兄嫁、姪っ子たちが残りました。

姉と私は関東で仕事をしていて、

兄嫁の側は、保護者になれるひとがいない。

そして、兄嫁さんと姪っ子たちを

父が面倒みるようになりました。

ですが、私の父も若くはありません。

もう 70 代になります。

いつまでも頼っているわけにはいかないし、

将来、兄嫁さんと姪っ子をどうするのか

考えることがあります。

姉にはたくさん我慢してもらいました。

私が逃げてばかりだったために、

10 年近く夢をあきらめて。

今やっと、やりたい仕事ができるようになりましたが
当初の夢だったメイクさんをあきらめて
美容師をしています。

さんざん迷惑かけて
姪っ子たちの面倒をみさせるのは申しわけない。

今までたくさん迷惑をかけてきた分、
せめて私が面倒を見ることができたら。

一緒に暮らすまでいかななくても、
様子を見れる距離に住んでもらったり、
面倒を見れるだけの稼ぎを確保したい。

これが、末っ子なのに実家を継いでほしいといわれたこと

そして、私が稼ぐんだ！と決めた経緯です。

いかがだったでしょうか。

かなりショッキングな内容を含んでいたと思います。

私にとっても衝撃的な出来事でした。

身近な家族が亡くなっている私にとって、

人生は一回きり。

ということが強く刻まれています。

だから、今も本気でビジネスを学んでるし、
行動することに迷いがありません。

以上、ゆきでした。